

---

Alice...

離宮 愛琉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Alice . . .

### 【Nコード】

N5376H

### 【作者名】

離宮 愛琉

### 【あらすじ】

現れたのは一人の青年。少し長めの金髪に空を映したような碧い瞳。彼はたった一つの希望の光であり、夢の終わりを告げる者。何を求め何を成し得、何を失い、何を迎えるのか：世界の道筋に従うのなら彼の訪れは必然かはたまた、異端のものか：「：噛み合った運命の歯車が、永遠をもたらす事を…」全ては「アリス」リデルの名のもとに。」

## Prologue

ここに…果てはあるのだろうか。  
どんなに先に進んでも一切の光も届かない深い闇の中を俺は歩いて  
いる。

いや、実際は自分が進んでいるのかも分からない。  
自分以外、何も見えないから、進んでいるのか分かる訳がない。  
…でも、足はちゃんとつくなんて何だか不思議だ。

…どうせ、行くあてなんてないんだけどな。  
あそこじゃないどこかへ、行きたいだけなんだ……  
いや、べつにどこかへ行きつきたいなんて訳でもないけど。

あそこって…どこだ？  
俺は、…違う。

逃げたいんじゃない。俺が逃げる必要なんてないだろう？

…帰りたくない、これは俺の意思だ。

逃げてるんじゃない…、絶対に。

大体、俺は…俺…は、……俺？

俺って…誰なんだ？

…光が………世界が、  
見えてきた。

まだ昇り切っていない日の光が木の葉の間を滑るように抜け、地面を照らしている。

その空気はふわりと暖かく、風に揺れる木の葉の擦れる音も気持ちよさそうに聞こえる。

そんな木々の生い茂る場所に、一本の細い小道があった。

道、といえる程整った道ではないが、人が通る場所だという事はおよそ見当がつく。

そんな小道を、一人の青年が通り抜けた。

彼はトレードマークのような少し大きめのシルクハットを多少目深に被っていて、表情は窺えないが、年齢は大体十代半ばかそれより上に思われる。

正装のようにしっかりと黒い燕尾服を着こなし、その服装で走っている光景はいささか不可解だ。

そうして間もなく、森が終わり、視界が開けた。

そこにはきつちりと整備された庭があり、その奥に堂々と構える大きな城があった。

常人では入ることも憚れるほどの威圧さえあるその空間を悠々と青年は走り抜け、城の扉を開いた。

そうして少し立ち止まり、短く息を整えてからゆつくりと歩きだし、奥にある大きなドアのノブに手をかけ、ゆつくりとそのドアを開いた。

……そこには、薔薇色のドレスに身を包んだ少女が優雅にお茶を楽しんでいた。

大きく放たれた窓からは日が差し込み、心地よい風が彼女の長い金の髪を揺らしていた。

年のころは青年と同じであろうが、彼女からは彼にはない威厳のよくなものを伺い知る事ができた。

少女はティーカップから口を離し、反対の手に持っていた懐中時計を眺め、その蓋を閉めた。その音とティーカップを置く音が重なって聞こえる。

ふっ、と一息ついて彼女は部屋に入ってきた青年を、その蒼い瞳で捉えた。

「2分と17秒の遅れね。それより、私の部屋へノックもなしに入るとはどういう事かしら、帽子屋？」

帽子屋と呼ばれた青年は恭しくお辞儀をすると、まっすぐに彼女を見て微笑をこぼしながら話し始めた。

「失礼いたしました、女王陛下。何分急な話で、陛下もお急ぎだと伺っていたので……」

「弁解はいいわ。今回は私にも非があったという事で許してあげましょう。……お掛けなさい。」

失礼します、と短く言った帽子屋は女王の向かい側の席へ腰を下ろした。

「お茶はいかがかしら？生憎、今日はお酒を出せるような内容の話ではないのよ。」

「いえ、結構です。今日はそのつもりで来たので……さっそくですが、本題を伺っても宜しいでしょうか？」

女王は一つ頷くと、短く息を吸い、真剣な顔つきで話始めた。

「……今回のアリスだけねど、どうやら、最後のアリスらしいの。」  
その言葉を聞いた帽子屋は思わず息を飲んだ。

「……最後のアリス、ですか？」

「ええそうよ。だから今回のアリスが真のアリスである可能性が高いわ。……ただ……」

そこで言いよんだ女王を怪訝に思い帽子屋は眉を顰めた。

「……ただ、何かあるのですか？」

その言葉に女王は一度悲しげな表情を見せたが、すぐに目を伏せ、祈るように口許で指を合わせてゆっくりと言葉を紡いだ。

「白ウサギが、今度のアリスを殺そうとしているの……」

帽子屋は少し驚いたような表情を見せたが、全てを理解したように頷き、最初の微笑を浮かべた。

「それで、俺を呼んだ訳ですね。∴それで、今回の依頼は？」

その問いかけに女王は目を開いた。

「∴よく、分っているじゃない。話が早いわ。アリスを守って

ほしいの。」

「それは、どこまでの域で？」

「ウサギの、首に代えてでも。」

そこまで聞いて帽子屋は自分の被っている帽子を取り、胸の位置に当て、恭しく頭を垂れた。

少し長い黒髪に整った顔が露わになった。そうして顔を上げ、漆黒の瞳に真っ直ぐと女王の姿を映した。

「仰せのままに、女王陛下。∴ところで、今回の報酬は？」

「ええ、これくらいでいかがかしら？」

そう言っただけで女王は帽子屋に小切手を差し出した。

それをざっと眺めた後、帽子屋はにわかに笑みを深め、頷いた。

「貴女様のお望みとあらば、いかなる事でも致します。」

鬱蒼とした森の中、そこに少し開けた場所があった。

日の光と共に降り注ぐ雨に打たれながら、そこに青年が立っていた。深紅のシャツに黒のスーツを着崩したように身にまとい、紅い髪の間、猫の耳を生やしたその青年。切れ長の瞳に写るのは、横たわるもう一人の青年だった。

太陽の光りを写したような金色の髪を雨に濡らし、投げ出すような形で仰向けになっている彼は、木葉より降りかかった露を顔面に受け目を覚ました。

そうしてその蒼い瞳に捕らえた、目の前にいる青年に澄んだ低い声で問い掛ける。

「…お前、誰だ？」

問い掛けられた青年は、どこか含みを持った笑みを浮かべ、歌うような口調で逆に問い掛けた。

「君はただの物好きかい？それとも自分の事さえ分からない愚か者？」

その謎掛けのような言葉の意味をまるで理解できていない彼は、ただ自分を見下ろしている青年を見つめていた。

「……どうやら、後者のようだね。…アリス？」

「ア…リス？何の事だよ、俺は…？」

アリスと呼ばれた青年は言葉につまった。そして彼は勢いよく起き上がり、頭を抱えた。

そんな様子を見ていた青年は、クスクスと笑いながら話した。

「ほらね、君は何も分かっちゃいない…。愚かなアリスだ。」

その青年の言葉に、アリスは痺れを切らした。

「お前…なんなんだよ！俺の事、何か知ってるのか！？」

アリスはかみ付くように言葉を吐いた。

そして、そんな彼を宥める事もなく、青年は言った。

「僕はチエシヤ猫。お前の事なんて何も知らないし、知りたくもないね。でも、それがアリスとなったら話は別さ。」

「な…何の事だよ!!!アリスって誰だよ!?!」

そんなアリスの言葉に肩をすくめ、彼に対し背を向けたチエシヤ猫は、辺りを見回しながら答える。

「アリスは残念ながら君みたいだよ。まあ、『終わりのアリス』だけどね。君がいないとこの世界は成り立たないけど、君がいたってどうせ終わるしかない世界さ。さて…そろそろあいつが気付く頃かな?僕はもう消えるでしょう。」

チエシヤ猫はそう言うと、足の方から徐々に姿を消していく。

「なっ…、お前!!!」

「だからチエシヤ猫だって…。あ、そうそう、優しい顔した奴には気をつけた方がいい、アリス…」

そうしてチエシヤ猫が完全に消えた時、アリスの後ろから足音が近づいてきた。

そうして足音が止まり、低い声が響いた。

「君は…どこから来たんだ?」

振り返ると、そこには黒いえんぴ服に身を包んだ背の高い青年が立っていた。

彼は大きなシルクハットを目深に被り、表情は伺えないが、整った顔立ちをしている。

「どこ…って…ここはどこなんだよ!?!」

その答えに青年は微笑んだ。

「ここをどこだか分かっていない…。それはいい。」

「は!?!なにを…っ!?!」

アリスは言いかけ、言葉を失った。

…青年の手に持たれた銃を見て。

森の中に轟音が響き渡り、弾丸がアリスのすぐ横を通過して行った。

「…白兔、まだ隠れているようなら遠慮なく撃ちますよ。」

まだ銃を構えたままの青年は森の中に向け、言葉を投げ掛けた。



そうして数秒の後、近くにあった木の影から人影が現れた。

「…なんだあ、やっぱり気付いてたんだね、帽子屋？」

そう言つて現れたのは10代半ばか、あるいはそれより下と思われる少年だった。

彼は白いシャツにカボチャパンツという出で立ちで、紅い瞳に銀の髪を携え、その頭に、白い兎の耳を生やしていた。

あどけない笑顔で自らが帽子屋と呼んだ青年に対し両手を上げた。

「…貴方の事は陛下から伺っています。妙な事、するもんじゃないですよ？」

「はいはい！僕だつて首は惜しいしね、大丈夫だつて帽子屋！ほら、銃下ろして？」

全く、と悪態をつきながらも帽子屋は銃を下ろした。

それを見た白兎と呼ばれた少年は跳ねるように帽子屋に近寄つてきた。

「ありがとう、帽子屋！でもねえ…」

そう言いながら屈むような形で帽子屋の顔を覗き込んだ白兎は、一瞬だが大人びた笑顔を作り

「そんなに甘いと、僕より先に首が跳ぶよ？」

どこか鼻につくような言い方言った。

その言葉を軽くかわし、帽子屋はシルクハットを被り直しながら答える。

「それはないかと思えますけどね？大体、彼女に私の首が落とせるとは思えません…」

「あはっ 随分と自信たつぷりだね、帽子屋？」

「おいっ！！お前ら何なんだよ！！？」

今まで事の成り行きを見ていたアリスは、突然声をあげた。そんな彼を一瞥した白兎と帽子屋は互いに顔を見合わせた。

そうしてふつと表情を緩め、二人同時に、帽子屋は帽子を、白兎は手を胸の位置に当て、アリスへ向かい頭を下げた。

そうして顔を上げ、白兎が言う。

「ようこそ！不思議の国へ！！アリス？」

「城で陛下がお待ちです。どうぞ、迷わぬようついて来て下さいね？」

帽子屋が出て行った後のその部屋には静けさが広がっていた。ただ、時計の針の音と風の吹き込む音だけが微かに聞こえている。残された女王は先程と変わらず椅子に座ったまま目を伏せ、ただ時計の針が動く音を聞いていた。

「……貴方がここへ来るなんて珍しいわね。…姿を表したらどうかしら？」

女王は唐突に言い放ち、顔を上げ、真つ直ぐ前を見つめた。数秒の後、女王の見つめる先に猫の耳が現れた。

その耳から徐々に姿を表していき、足の先まで完全に見えてからその青年、チェシヤ猫は踊るように身を翻し深くお辞儀をした。

そうしてその状態から顔だけを上げ、女王に言う。

「こんにちは、女王陛下。全く、貴女の目の前では誰も逃れる事は出来ないようですね。」

そう言った後体全体を起こした彼はにこやかに笑った。

「相変わらず礼儀がなっていないけれど…まあいいわ。それで、私に何を伝えに来たのかしら？まさか貴方に限って談笑しに来た、なんて事ないのでしょう？」

そう言いながら女王は自分の向かい側の席に座るように指して命令した。

それを見たチェシヤ猫は女王の向かい側のテーブルに右足と体乗り出すような形で乗った。そうして右手をテーブルにつき、女王と視線を合わせた。

「さすが。…ご名答ですよ、陛下？」

「そんな戯れ事、言いに来た訳ではないのでしょうか？早く用件を言ったらどうかしら？」

それを聞いたチェシヤ猫は状態を起こし、彼女に背を向け大袈裟に肩をすくめた。

そうして後ろに両手をつき、体を大きくのけ反らした。

そのままの恰好でにんまりと笑った彼の顔は女王に触れないギリギリの距離だった。

「…アリスは、リデルじゃないよ。」

チエシヤ猫のその言葉に、女王は目を再び伏せ、椅子の背に寄り掛かった。

「……そうね。時計の、時を刻む音がするもの……」

そう言うってから女王はゆっくりと目を開いた。

「刻まれた時は戻る事を知らない。もう、悪あがきすべきじゃないよ？陛下」

そう言い残したチエシヤ猫は瞬きをする間に姿を消していた。

残された女王は手の中にある、時を刻み続ける時計を見つめていた。

「…何を信じるべきだったか、なんて今更ね。最後の最後まで諦めないというのも、滑稽だわ。けれど……」

心地良い風が強く吹き込む。

穏やかな昼下がりの部屋に佇む少女が一人

「望みさえない世界に、生きるのは辛過ぎるわ……」

彼女の頬を一筋の涙が伝った。

そうして暫く経った後、部屋のドアがノックされた。

「陛下、アリスを連れて参りました。」

ドアの向こうから聞こえた声は帽子屋のものだった。

「…入りなさい。」

数秒の後、ギイという音と共にドアが開いた。

現れたのは一人の青年。

少し長めの金髪に空を映したような碧い瞳。

彼はたった一つの希望の光であり、夢の終わりを告げる者。

何を求め

何を成し得、

何を失い

何を迎えるのか…

世界の道筋に従うのなら

彼の訪れは必然か

はたまた、異端のものか…

「…いらつしやい。『アリス』」

そう呼ばれた彼は躊躇いながらも彼女に近いた。

「……俺が…アリス？」

アリスのその言葉に女王は微笑み、立ち上がった。

そうして彼の前に立ち、ドレスの裾を持ち上げて軽くお辞儀をした。そうして顔を上げ、祈るように手を組み、歌うような口調で語りかける。

「…噛み合った運命の歯車が、永遠をもたらす事を…」  
全ては

「アリス＝リデルの名のもとに。」

暫くの静寂の後、勢いよくドアが開いた。

「女王様！！お茶会しよーよー！！」

そう言つて飛び出して来たのは白兔だった。その後ろには帽子屋の姿が見える。

「また貴方は…物事には順序というも…」

「いいでしょー??どうせアリスに教えなきゃいけないし。ねっ? 帽子屋も!!」

女王が言い終わらない内に言い出した白兔は、はしゃぎ回り、もう止められそうにない。

そんな彼を見た帽子屋は一つため息をつき、女王へ話しかける。

「陛下、どうせですから白兔のいう通りに致しませんか?…引きそつにもありませんし、確かに話さなければならぬ事もあります。」

帽子屋のその言葉に女王は少し考えた後、頷いた。

「そうね。では…メアリ!!」

そう言つた女王は椅子に座り直し、ドアの方を向いた。

「はい、女王様。お呼びでしょうか?」

そう言つて現れたのは長い金髪を二つのおさげに結つた碧い瞳の少女だった。

水色の服に腰から下だけのエプロンをしている姿から、どうやらこの城の使用人らしい事が分かる。

そんな彼女に対し女王は命令する。

「メアリ、お茶会の用意をなさい。」

「はい、わかりました!」

そう言つてメアリは部屋から出て行つた。

「お茶…会…?」

未だ状況を理解していないアリスは立ち尽くしていた。

そんな彼に気付き、女王は先程の猫と同じように、椅子へと座るよ

う手だけで命じた。

それに習い椅子へ座ったアリスとほぼ同時に白兔と帽子屋が彼の両脇に座った。

「さあアリス？貴方の事、教えなければね…」

女王がそう言った時、メアリがお茶会の用意を整えたワゴンをひいてきた。

「ありがとう、メアリ。貴女も一緒にどうかしら？」

「いえっ！私は…あ、女王様。今日の4時、ディーがドレスの採寸に来るそうです。」

「あらそう…。わかったわ、下がっていいわよ？」

失礼します、と言ってメアリが出て行った後、白兔がぴよんとテールに身を乗り出した。

「ミールクーー！！！！！」

「行儀が悪いですよ。」

そう言つて帽子屋がもう少しで届きそうだったミルクのビンを取り、白兔の前へ置いた。

むーと頬を膨らませている白兔を横目に女王は話を進める。

「さて、どこから話しましょうか…」

不思議の国は一人の少女の夢から始まった。

その名を、『アリス＝リデル』。

彼女の夢見た世界がこの世界の成り立ち。

それ以上の説明はできない。

この世界はそんな世界。

彼女のいない世界では不思議は成り立たない。

彼女の死後、世界は消えるかと思われたが、不思議の国が失われる事はなかった。

「その理由は…」

そう言つて女王は持つていた懐中時計を持ち上げた。

「…時計？」

「ええ、これはこの国の時を正しく刻む唯一の時計…」

「唯…一？」

「この世界は他の世界と時の流れが違うからね。アリスの気分で昼にも夜にもなるんだから。一個あつただけで奇跡だよ？」

アリスの質問に割り込むように答えた白兎は並々と注いだミルクを豪快に掻き回していた。

そうして一口飲んだ後、アリスの顔を下からのぞき見た。

「あ、でも今はそんな事ないからね？」

そう言つて笑つた見せた白兎は、帽子屋と顔を合わせた。

「…どうゆう意味だよ」

「この世界の時は、今まで、進んでいるかのように見えて絶対に進む事はなかったの。…アリスが死んでからは…」

アリスの質問に答えながら女王は時計をテーブルへ置いた。

アリス＝リデルの死後、不思議の国はいわゆるパラレルワールドとして存在した。

ただ、新しい時を刻む事なく、同じ物語を何度も繰り返しながら…。

「アリスがいないと成り立たないこの世界にアリスのいない時が流れると…この世界はどうなると思いますか？」

帽子屋の言葉でアリスはやつと頷いた。

「…消えるしかない、でしょ？」

割つて白兎が口をはさむ。

「まあ、簡単に言つとそうゆう事ですね。…そして、時計同様、ある一定の時期を越えるとまた新しい時を刻まなければならない時が来るんです。意味は分かるでしょうか？」



そこでアリスは首を傾げた。

「つまりね、ある時期を越えたとまた新しい時間を作らなきゃいけないの！12時を越えたとまた新しい日を迎えるみたいだね……」

白兔はテーブルにもたれながらお茶のなくなったカップの底を見つめ、言った。

そんな白兔を見て、彼のカップにお茶を注ぎながら帽子屋が言う。

「……つまり、ですね。アリスを迎えなければいけない時期というものがあるんですよ。……ただ、アリスは存在しないので……」

「貴方が選ばれここに来た。……貴方は24番目の、最後のアリス。」  
女王がカップを置きながら言った。そうしてアリスを一瞥し、でもね、と話を続ける。

「貴方が、アリス＝リデルの血を持つ者でないとこの世界は消えるわ。」

それに対しアリスは眉をひそめ、背もたれに寄りかかり腕を組んだ。そうして嘲るように言った。

「残念ながら、俺はそんな夢見る少女じゃない。だいたい血を持つ者って……本人は死んでるんだろ？いる訳がないだろ」

「……世界には、もう一人の自分というものが存在します。貴方達の世界での名称は知りませんが……会うと死ぬと言われている存在らしいですね。それを私達の世界ではジョーカーと呼び、アリス＝リデルの代わりになる唯一の存在とされています。その候補として最後に選ばれたのが、アリス。貴方なんですよ。」

その帽子屋の言葉に僅かながら女王が目を見伏せた。

そうして決意したように一度姿勢を直し、抑揚のある声で言う。

「でも、違ってたわ。……貴方はアリスではない。」

言い終わった瞬間、全員が彼女を見た。

「……なんだ、知ってたんだ。じゃあ……」

そう言うつと白兔は立ち上がり、女王の目の前まで行き、テーブルに置いてあった懐中時計を手に取った。

「白兔っ！！！！」

叫んだ帽子屋を制すように白兔を見たまま女王は微笑んだ。

「確かに私達は過去に禁忌を犯した。けれど、今の世界を壊したとしても時間は戻らないわ。」

「うるさいっ！！！！！！」

女王が言い終わるかどうかのうちに白兔が叫んだ。

そうしてアリスに銃を向けた。

「僕は、あんたをアリスとは認めないっ……！！」

そうしてその引き金に指をかけた瞬間、アリスは微笑み、言った。

「……そうか。じゃあ、撃ちなよ。」

「は……？なんだよ……」

「俺を殺すのが君の意思なら、躊躇う必要なんてない。それとも、揺らぐくらいの思いで俺が殺せると思っているの？」

「……………っ！！」

アリスの言葉に驚愕の表情を浮かべた白兔は部屋を飛び出して行った。

「……………白兔を追わないのですか？アリス。」

「何でだよ。物語はもう繰り返せないんだろ？」

そう言つとアリスは立ち上がり、窓の外を見た。

「……俺は、肩書なんかには捕われない。どうせ終わるしかない運命なら、やりたい事、好きにやらせてもらおう。」

「……そうねアリス。……でもその前に……」

そう言つと女王は立ち上がり、アリスを手招きした。

「貴方の部屋を、案内するわ。」

そうして二人が出て行った後の部屋で帽子屋は

「……私は、猫と違って暇を持って余すのは得意じゃないんですけどね。」

一人悪態をついていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5376h/>

---

Alice...

2010年11月18日14時35分発行